
鈴木康夫教授送別の辞

高田 伸夫

東邦大学医療センター佐倉病院臨床生理機能検査部

鈴木康夫教授と働かせていただいた15年間に感謝して鈴木康夫先生は1981年に滋賀医科大学を卒業され、その後千葉大学医学部で診療・研究に従事された後、2003年に東邦大学佐倉病院 消化器内科の助教授として赴任されました。当時は消化器内科医局員が激減しており、先生を含めて3人での再スタートとなりました。

しかし、鈴木先生はこのような状況のもとでも「世界最高の消化器内科を構築する」ことをグループの目標として掲げ、まずは人の少ない消化器センター運営にご尽力くださる傍らで、ご自身が主催する研究会を通してIBDの世界を医局内に浸透させることにも力を注がれました。この活動をみた多くの若いドクターが消化器内科に参加して下さるようになり医局員はスタート時の5倍以上に増加し、地域の消化管診療を支えさらに日本の炎症性腸疾患をリードする診療科にまで成長させてくださいました。

鈴木先生は、診療・教育・研究にあたって「志は高く、目線は低く」をモットーに活動されてこられました。単に高い結果を追求するのみならず、医師としてまた人として常に謙虚であり続けることも求め続け、それを先頭に立って実践してこられました。

現在チーム医療が当たり前のように叫ばれていますが、最高のチーム医療を実現するには強いアカウンタビリティと高度のサイコロジカルセーフティ環境が要求されます。鈴木先生は、広く知られる前からこれらのことを真摯に実践して最高の医療チームを作り上げ、このことが

消化器内科を大きく飛躍させた原動力となりました。

鈴木先生ご自身も、2006年の消化器内科教授への昇任をはじめとして、消化器センター長・内科主任教授・副院長・IBDセンター長・各種学会主催・厚生労働省科学研究班班長等々病院内外の役職に次々就任されてご多忙な日々を送られますが、その都度わたくしたち医局員に新しい世界を経験させてくださいました。

ただ、このような素晴らしい環境にしながら、わたくしたち医局員一人ひとりのアカウンタビリティが十分であったかは反省することも多く、鈴木先生ご退官のあとも気持ちを引き締めていかなければなりません。

とにかく、鈴木先生が当医局にお見えになって15年、臨床・研究・教育そして組織の各領域にわたり様々な変革をもたらしてきました。これらの経験はすでに退職したOBの先生たちにも大いに役に立っており、先生ご退官後もわたくしたちは次世代のドクターたちに伝えていかななくてはならないと考えております。

幸い、鈴木先生は今後も特任教授として残れることが決まっており、一緒に仕事をさせていただきながら、わたくしたちの見逃していたものをしっかり捕まえていけらと願っております。

一方で、先生に負担がかかりすぎないように努めながら、先生のこれからの益々のご活躍とご健康も心より祈念いたしております。長きにわたりありがとうございます。